

富中だより



令和3年度合い言葉
元気なあいさつ笑顔が一番、仲間を認め合い、地域と共に創る魅力のある学校

(学校便りのこの欄は、生徒の皆さんに読んで欲しい内容が中心です)

人を思いやるということ

校長 水野 秀哲

生徒会書記局の皆さんが、生徒玄関に新しいスローガンを掲示してくれました。

「自らコロナ対策をし元気なあいさつが響き合う学校にしよう」

まさしく、その通りです！ 後ろや下ばかりを見ずに、前を向いて明るく頑張ってください！

さて、今回の臨時休校やコロナ感染症にかかわって、本校の学校医、須貝先生とお話しをしました。

現在皆さんが取り組んでいること＝手指のこまめな消毒、三密を避けるなどには、きちんとした科学的な根拠があることを教えていただきました。また、「安全・安心な学校は生徒の手でつくる」その意気込みも須貝先生に伝えました。

しかし、須貝先生が最も気にかけていらしかったのは、この感染症にかかった人たちへの思いやりのない言動や対応についてでした。

要約すると、「誰でも感染する可能性がある。それは人間性の問題ではない。にもかかわらず、非難されたり、中傷されたりすることがおこる。思いやりをもって、<大変だったね>といういたわる気持ちや、慈しむ気持ちがあって当たり前なのに、残念でならない。」という内容でした。

今も昔も、人間社会では、他人のことを陰で悪く言ったり、非難したりすることがなくなりません。ネット社会が発達し、匿名（自分の名前をふせて）で意見表明ができるようになって、より陰湿になっているように感じます。いじめの構造にも通じるものがあります。

人類の歴史をみても、自分と異なるものを排除しようとする動きは、戦いの歴史として刻まれています。話している言葉が違う・信じている宗教が違うというだけで戦いが起こり、多く

の命が失われています。そのような異なるものを排除しようとする構造やいじめの構造は、人間が元来もっているものだと指摘する学者もいます。

けれども、私たち人間が他の動物と大きく違っているのは、理性や知性をもって、感情や本能をコントロールできるということです。私たちは、異なるものを排除しようとする気持ちをコントロールすることができるはずなのです。

「自分がされて嫌なことは他人には絶対にしない」というのは、皆さんの中では当たり前になっているはずですが、しかし、毎日のように、相手のことを考えない、心が痛くなるような事件が報道されます。

須貝先生は、「差別が起こるのは、ある問題（例えば感染）が<他人事>だからだと思うようになりました。<自分事>であれば、思いやりをもてると思いますが、<他人事>だと自分を正義の立場において他人を差別するようになる」とおっしゃっています。

まさしく、<自分事>になっていないのだと思います。「心が痛い」ということ、世の中に、それがどういうことなのか通じない人がいることは、とても残念です。皮膚を切れば傷が付いて血が出ます。しかし、心が傷ついても目には見えません。その傷が深かったり、沢山の血を流すようなものであったとしても目には見えません。「心が痛い」のを感じる事ができる、思うことができるのは、まさしく<自分事>としてとらえることができるからです。

さらに、SNS上でよく見聞きすることがらに、誹謗中傷があります。名乗らずして陰湿な行為をするのは、「卑怯」なことです。「卑怯」～最近あまり使われない言葉ですが、**皆さんにはけっして卑怯な人間にはなあってほしくありません。**「卑怯」とは何か。辞書で、ネットで是非調べてみてください。

挨拶の有用性は、前号で書きました。**思いやりをもった行い**も、**人間関係を豊か**にします。社会に出て行く前に、豊かな学校生活をつくりあげていきましょう。

